桐敷、水沼、冨田姉妹、帝京長岡…新潟アスリートが今と未来を語る。

NIIGATA Sports Magazine

新潟スポーツマガジン スタンダード

Standard

新潟 NIIGATA

2022 Spring

［春号］定価1,000円

高校バレーボール
男女807人 61校 選手名鑑

特別インタビュー
冨田せな&るき

高校野球
6投手の春～夏

日本新、パリへ
水沼尚輝

アルビ「14」を継承
三戸舜介

虎投始動
桐敷拓馬

CHALLENGE 挑戦

特集 新たな道を拓くとき。

日本一になるために
帝京長岡バスケ

陸上400mの夢
鈴木大翼

…and more.

中村真衣カップ水泳競技大会

高校ソフトテニス県選抜大会

大学・高校・中学
県内トップアスリート
69人進路先

NIIGATA SPORTS TOPICS

受賞スペシャルインタビュー

冨田せな
Tomita Sena

「たくさんの方に支えられて感謝の気持ちでいっぱい。スノーボードの魅力を広めていきたい」

新潟日報スポーツ特別栄誉賞

冨田るき
Tomita Ruki

「次も出られるようにしっかりとトレーニング。これからも応援よろしくお願いします」

北京2022冬季五輪のスノーボード女子ハーフパイプで銅メダルを獲得した冨田せな、5位入賞の冨田るきの姉妹選手に、3月11日、新潟日報社からスポーツ特別栄誉賞が贈られた。贈呈式後、新潟日報社とホイッスルスポーツ・スタンダード新潟との共同インタビューに臨み、現在の心境や新潟県民に対する感謝の気持ちを語ってくれた。

撮影◉伊平裕哉（スタジオ嶋田）
取材協力◉新潟日報社

■銅メダル獲得

せな（以下S） 最初は信じられなかったけれど、その日の夜のメダルセレモニーでメダルを手にした時に実感が湧きました。

■5位入賞

るき（以下R） 1本目と2本目でこけたので、自分の中に焦りだったり、次もこけたらどうしようという不安もありましたが、一緒にいたせなやコーチにポジティブな言葉をいただいて、そこで立て直すことができ、最後まで滑りきることができて良かったと思います。

■五輪後帰国して

S ほとんど毎日取材などが入っていて、妙高で3日間くらいスノーボードをしてやっと日本でシーズンインもできたので、うれしかったですね。

（地元は）知っている人も多いので声をかけてもらったりして、小さい頃から滑った山ではあるので、戻ってきたという感じでうれしかったです。

R せなの方が取材の数が多かったんですけど、私もちょこちょこ出させていただいて。取材してもらうことがあまりないので、すごく緊張しました。

（昨年の）10月からずっと海外のスキー場ばっかりでした。日本のシーズンが始まったというのを（ニュースで）見て早く日本で滑りたいなと思ってたので、少しの間ですけど滑ることができて良かったです。

■スノーボードの魅力

S スタイルかな、自分らしさを出す。ずっと『カッコイイ、男らしい滑りをしたい』と滑り続けているので。自分自身からもそういう魅力をどんどん伝えられたらいいなと思っています。

CHALLENGE
挑戦
❷パリ五輪へ

自分らしく。新潟から世界へ。

競泳／新潟医療福祉大学

水沼尚輝 Mizunuma Naoki

昨年の東京五輪競泳男子100メートルバタフライ代表の水沼尚輝（新潟医療福祉大学職員）は今年、あらためて世界の舞台に立つ。3月5日の国際大会日本代表選考会で日本記録を13年ぶりに更新する50秒86をマーク。6月の世界水泳選手権、9月のアジア大会代表に内定した。新潟医療福祉大学で開花した大器は、2024年パリ五輪でのメダル獲得に向けて着実に歩を進めている。

撮影◉伊平裕哉（スタジオ嶋田）　文◉佐藤一朗（編集部）

表情の目元から下はマスクで覆われている。それでも笑顔でいることは伝わった。さらに補うように、水沼は両手を大きく振って会場の拍手に感謝を表現した。3月12日、長岡市のダイエープロビスフェニックスプールで行われた中村真衣カップ水泳競技大会の開会式。その中で世界レベルの大会に出場する水沼らの壮行会も行われた。

日本記録更新後、新潟で大会の場に現れたのはこの時が初めてだった。「役員の方や各チームのコーチの方々に『おめでとう』と言っていただいて」。大会に名を冠する2000年シドニー五輪女子100メートル背泳ぎ銀メダリストの中村真衣さん、水沼が更新する前の日本記録51秒0を持っていた河本耕平さんは中学、高校と長岡市で競技生活を送った。2人のお膝元で新記録樹立の報告ができた。そして世界選手権への抱負を言葉にした。「決勝に出てどう戦うか」。東京五輪、19年に初出場した世界選手権は準決勝で敗れた。「2回、悔しい思いをした。それを糧にどう戦うかを成し遂げたい。日本記録保持者として50秒台で

東京五輪前に課題に挙げていたスタート。まだまだ改善の余地があるというがきまずは自分の良さを伸ばすことが大切だとも語る

力の源は新潟の声援、人の温かさ。「新潟育ちのスイマー」として世界のトップを狙う

帝京長岡高校 バスケットボール

Teikyo Nagaoka

「柴田先生の練習」で昨年以上のチームに。

高校からバスケットボールを始めた選手もいる帝京長岡高校男子バスケットボール部。昨年以上の「いいチーム」を目指している

2015年にインターハイで初めてベスト4を勝ち取って以来、ウインターカップを含めて全国ベスト4は実に7回。ベスト4の常連校となり、全国から注目される存在になった帝京長岡高校。昨年はインターハイ、ウインターカップともに準優勝。日本一にはわずかに届かなかった。今季、帝京長岡はどのようなチームを作り、どのように戦っていくのだろう。

撮影◉星野健一（Office ANDANTE）文◉松島 聰（編集部）

「声、声がね。まだ物足りないんですよ」新キャプテンのジョンソン音央（ねお・3年）を先頭に選手たちが出す声は、十分大きく、校舎の外にいてもそれと分かる音量だ。それでも柴田勲監督は声の大きさに不満があるようだった。

「大きな声を出しながら、練習をするのは、気が遠くなるほど辛いものです」。卒業を控えた前キャプテンの田中空がそう教えてくれた。けれども田中は、そんな限界状態からチームの一体感のようなものが生まれて来るのを感じていたという。

昨年、地元・長岡で行われたインターハイ。決勝で中部大学第一高校（愛知）に敗れた後、柴田監督はチームのコミュニケーションが不足していると感じていた。ウインターカップに向けて、「一体感のあるチーム作りを目標にしていこう。目標は優勝ではなく、自分たちが理想とするチームを作ることだ。勝ち負けではなく、すっきりと笑顔で終われるようにしよう」。そうみんなに呼びかけた。「勝ちたい」という気持ちはもちろんある。しかし、この時は目指してきたことをやり切ることの方が大切に思えた。そして、「柴田先生の練習」を始めた。

「柴田先生の練習」は、コネ・ボウゴウジィ・デット・ハメード（3年）がよく口にする言葉。練習の内容は詳しく分からないが、そこには練習の厳しさに対するおそれと、それがもたらす成果に対する敬意と信頼がある。

柴田監督は公式戦での経験を大切にしている。それは練習の厳しさと表裏の関係になっている。

「公式戦はシンプルにいかなければならないんです。試合中、選手たちは、複雑なことを言っても受け止められない状況になっています。複雑なことは練習で身につけて、自然に身体が動くようにしておかなければなりません。そして、試合では練習を信じて、シンプルにやる。試合が終わると、必ず気づきがありますから、それを練習の課題にします。公式戦のように練習をして、練習のように公式戦に臨む。それが私の理想なんです」

ウインターカップでは初戦から課題の多い試合が続いたが、何とか勝ち切ることが

profile◉帝京長岡高校男子バスケットボール部◉2009年に柴田勲監督が赴任。10年から本格的にチームづくりを始めた。13年インターハイ新潟県予選で新潟商業を破って初優勝。15年・17年インターハイベスト4、2021年準優勝。16年から3年連続ウインターカップベスト4、21年準優勝。現在は常に全国大会で好成績を収める強豪校で、新潟アルビレックスBBのSF星野曹樹、SG遠藤善は同校出身。

柴田勲監督は「ウインターカップ決勝をゴールとして、チームを成長させていく」と語る

Crazy for BASEBALL
高校野球6投手の春～夏

球春到来!春の大会に臨む
6投手をピックアップ。

全国注目の二刀流

日本文理高校3年

田中晴也

TANAKA HARUYA

DATA 右投げ・左打ち/185㎝・86kg
長岡南中学校出身

昨夏の甲子園では1回戦で敦賀気比（福井）に8－6で敗れたが、潜在能力の高さは全国から注目された。185センチ、86キロの体格から繰り出す140キロ台後半の直球と、スケールの大きな打撃。甲子園では8回8失点、5打数1安打と満足できない成績だったものの、最終学年になるこの夏に期待する関係者は多い。

昨秋の北信越大会でも大器の片鱗を見せた。1回戦の高岡商業（富山）戦で自己最速の148キロをマーク。1－3で惜敗した準々決勝の星稜（石川）戦は8回を5安打6奪三振、3番に入る打撃では4打数1安打ながらチーム唯一の打点をマークした。「甲子園のチャンスはラスト1回。チーム全員が同じ方向を見て冬場を過ごしたい」。星稜戦後、オフシーズンの決意を話した。その成果を発揮して春から夏に向かう。

甲子園を見据える剛腕

帝京長岡高校3年

茨木秀俊

IBARAGI HIDETOSHI

DATA 右投げ・右打ち/184㎝・86kg
手稲中学校（北海道）出身

昨夏からすでにプロ複数球団がマーク。秋のドラフト戦線では確実に名前が挙がる逸材だ。週3回のウエートトレーニングで上半身、下半身とバランス良く強化。体重は昨秋の83キロから86キロにアップした。増量分は全て筋肉だ。2月に入って本格的な投球を始めた。芝草宇宙監督も「150キロ近くは出せると思う」と実力の底上げを感じている。

自信と課題を胸にオフシーズンを過ごしてきた。昨秋の北信越大会は1回戦で松商学園（長野）に2－3で敗れたものの、8回を6安打3失点の9奪三振。全国レベルの伝統校と互角に渡り合えた手応えがあった。同時に「1つのイニングでまとめて失点した。1回ごとに大切に行かないと」と反省も。「プロ入りを目指している」と明言。そして「そのためにもチームの勝利のために投げる」。まずは最後の夏へ照準を合わせ、春から力を示す。